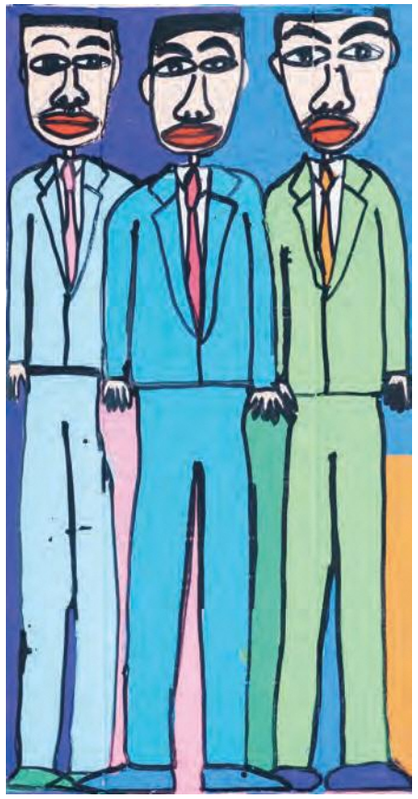
お仕事としてのアート

「その仕事を受け取って喜んでくれる人がいる、そういうところで自信を持ってもらえたら」

そう話すのは一般社団法人アートスペースからふる（以下、からふる）理事長・妹尾恵依子（せのおえいこ）さん。
「アートを仕事に」という大きなテーマに向き合いながら、それぞれの表現や魅力をどう見つけて引き出しているのか伺いました。

右：からふる理事長・妹尾恵依子さん



坂口真一郎〈無題〉2020年
モチーフの特徴を捉えて描き、特に人物画を得意とする。代表作は〈人物50メートル走〉。50メートルあるロール状の用紙を1メートルずつ広げて描いたという巨大なもの

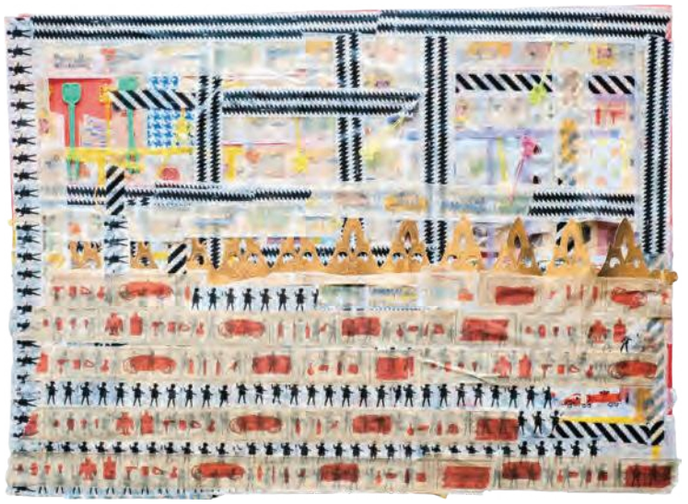
▲「Uni-Voice」という目の不自由な方のための音声コードです。

―どんな活動をされていますか？

私たちはアート活動自体を仕事にしているので、毎日どなたかが作品制作をされています。制作した作品やグッズを展示販売したり、作品をレンタルして企業や施設に飾ってもらったり、アーティストが保育園等に出向いて一緒に活動したりもしています。

―職員の方のフォローが適切で、コミュニケーションを大切にされている様子が伺えました。

支援ってどこまでしたら良いのかはいつも悩みます。手を出し過ぎると、その人の作家性を侵害してしまうし、逆に関わり方が浅いとその人が何に困っているかに気付けない。支援員は杖やメガネの役割ですから、よく観察して、知って、こういう時には手を貸さないといけないなというシーンを、私たちが一つ一つ学習していく必要があるなと思います。



ハルカ〈無題〉2022年
マスキングテープなどを何層も貼り重ね、作品作りをする。鳥取市民美術展の企画部門で3回の受賞歴を誇る。マスキングテープの会社mt（カモ井加工紙株式会社）からコミッションワーク（依頼制作）に取り組んだこともある

―それぞれの方の表現や魅力はどのように引き出しておられますか？

繰り返し試すことしかないですね。伊藤恵さんは、今でこそ、店頭に出せばすぐ売れてしまう人気のトートバックの刺繍を担当していますが、それまではもう手が無いっていうくらい、いろんな画材や素材を試しました。どれもあまり続かなくて、3年くらいはずっとそういう感じで答えが見つからなくて。
あるとき、本人が布製のバックを持ってきて、そこに付いていた織物の飾りは自分で作ったものだと教えてくれたんです。もしかして布や糸が好きなのかもと思い、刺繍を試したんですね。左手に麻痺があり力が弱いので、最初の頃は刺繍と言うより、とりあえず薄い布に糸を通すだけでしたが、これには飽きなかった。もういいって言わなかったんです。続けていくうちに今では人気のバックをつくる人になりました。布が厚いので、結構力が要るんですが、すごく頑張って制作できるようになりました。本当によかったと感じます。

―からふるさんの活動をどのように受け取ってほしいとお考えですか？

おそらく、うちが他と決定的に違うのは、彼らの作品は全て商品であるということ。仕事として制作するってどういうことなのかを時間を掛けて理解してもらおうと意識しています。
もちろん楽しく制作するのもいいのですが、その先に、その仕事を受け取って喜んでくれる人がいる、そういうところで自信を持ってもらえたらと思います。

一般社団法人アートスペースからふる
理事長・妹尾恵依子さんが主宰していたアート教室が発展し、2014年から就労施設として活動。鳥取市元町の商店街のビルが拠点で、1階が制作、2階が展示スペースとなっている。2019年に「ギャラリーからふる」として鳥取県はーとふるアートギャラリー第1号認定を受けた

上：笑顔が素敵な伊藤恵さん
下：伊藤さんがトートバックに刺繍をしているところ＊

流生（りゅうせい）〈ライチョウ〉2021年
色鉛筆で似て非なる色を何色も多用する描き方に定評がある。本人は色を変えている意識は無く、芯がすり減ったタイミングでイメージに近い色を都度手に取っているそう

▲「Uni-Voice」という目の不自由な方のための音声コードです。